

言述とは何か

——この問題に取り組むために——

鈴木隆芳

I

わたしは あなたが 好きだ

劇作家の平田オリザは、これは愛情の表現にはふさわしくない、愛を告白するときに日本語ではこんな言い方はしないはずだ、と言う。

他人ではない私が、という点を強調したいなら、「私」に力を入れてみよう。他でもないあなたが好きだということを強調したいなら「あなた」を、嫌いではなく好きなのだということを強調したいのなら「好きだ」に力を入れてみよう。さて、どうだっただろうか。あなたは他人を好きになったとき、愛する者に向かって、そのように喋るだろうか¹。

私自身の語感では、「この文章を日本語とは認めない」「そのように語る人を私は信用しない²」と平田が言うほどには、この日本語が破綻しているようには感じない。なんらかの文脈や物語が受皿になれば、この発話がむしろ効果的に機能する状況を想像できるからである。言葉が適切かどうかは、当事者の交感の具合によって左右されるものであって、自然な日本語というのもそこから

1 平田オリザ『平田オリザの仕事1 現代口語演劇のために』、晩聲社、1995年、pp. 51-52.

2 同書、p. 52.

生じるひとつのケースであるように思う。

ただ一方で、平田の言うことが看過できないほどの重要性を帯びるのは、日本語では一人称「わたし」に意味上のアクセントを置こうとした場合に「わたし」に相当する代名詞を用いたり、また、これを強く発音したところで、さしたる効果が望めないという、一見あたりまえのようではあっても、その理由をいざ問われると説明に窮するような事実を言い当てているからである。日本語において、文の主語と発話主体がある程度同一視できる場合の「私」の強調は、助詞・助動詞を用いて施されることが一般的で、主語を明示せずに「好きなの」「好きなんだ」「好きなんだもん」という語尾によって「わたし」が表れる。たとえば「好きなんだもん」であれば、だって仕方ないでしょう、自分じゃあどうにもならないんだから、というしなだれがかかった「わたし」が喚起される。

このように、助詞・助動詞の機能から言述主体を考えるという思想の潮流を辿って行くと、時枝誠記の言語学にまで至る。彼は日本語の実態に即し、虚詞である「辞」に「わたし」、すなわち主体の活動が表れると考えた。この「辞」が、あらかじめ意味をまとった実詞であるところの「詞」を包摂することで、言語は言述として現れると説いたのである。それは潜勢態にある言語が現働化 actualisation する契機を説明するものであったといえよう。

我々が若し意識に映ずる種々なる表象或は概念を、文字或は音声に表現して、山、川、月、花、行く、見る、走る等といった場合、それは意識の客体的みを表出したのであって、これを全き意味の思想の表現とは言い得ないであろう。それは、思想の客体化された側面のみを表出しているのであって、未だ自我それ自体の表現をとまなっていない。しかし、「山だ」「川だ」といった場合は、そこに始めて言語主体の客観的側面である表象或は概念と同時に、主体のそれに対する判断作用の表出をも見るのでできるのであって、ここに始めて思想が表出されたということが出来るのである³。

3 時枝誠記『国語学原論』（下）、岩波文庫、2007（1941）年、p. 46.（傍点は鈴木）

文字や音声で表れる「山」「川」などは、表象あるいは概念に過ぎず、これは言語標本のような意識の客体である。ここに主体の判断作用が伴い「山だ」「川だ」となったときに、ようやく思想の表出となる。ただ、「辞」は必ずしも明示される必要はなく、「山だ。」と言おうが、または、単に「山。」と言おうが、そのいずれにも主体の「統覚作用」あり、「だ」を伴わない「山。」にも、「だ」に相当する陳述作用を司る零記号としての「辞」がある、と時枝は言う。

このように時枝は、「詞」に表象を形成する機能を認めつつも、「辞」が担う主体の活動をもってはじめて言述が現れるとしたことで、コミュニケーションの機能が前景化した指示性の強い言語と、一方で、その対極にある詩や文学の言語という、異なる様相を呈する「二つの言語」に由来する二元論を克服できた。「文学が、言語と連続的なものであると云うことは、言語の持つ機能は、文学も、また、これを持ち、文学といえども、その観点から見られなければならないことを意味する⁴。」

II

古くからの和歌には、自然物を観照し描写しているだけで、ともするとそこに歌人本人の主体性がほとんど表れていないかのように見えるものがある。時枝はこれを「眺める文学」と称し、一方で、主体が色濃く表れるものを「呼びかける文学」と呼んだ。もちろん彼の目的は、これらが相容れないことを示すことではなく、たとえ主体の表れ方に濃淡のちがいがあのように感じられるとも、双方が陸続きであることを主張するためであった。

み山には松の雪だに消えなくに都は野辺の若菜つみけり（古今集、春上）⁵

この歌のように「自然観察の記述」から生まれた歌であっても、山はまだ冬なのに都にはもう春が来ているなあ、と詠嘆を伴いながら「み山（深山）」と

4 時枝誠記『国語学原論 続編』、岩波文庫、2008（1955）年、p. 131.

5 同書、p. 138.

都の季節を対置しており、ここに時枝が言うところの「意欲的態度」が見える。さらに、「み山には」「都は」の「は」、 「雪だに」の「だに」、 「若葉つみけり」の「けり」などの「辞」に主体の活動を読み取ることもできよう。

こうした時枝の思想にはある懸念が含まれている。かりに「眺める歌」と「呼びかける歌」という区別を本質的なものと認め、これらを別の次元のものとしてしまえば、日常的な指示性の強い言語と、情意に富む文学の言語はただ乖離してゆくしかない。言語学は、言語にはなぜこうした二つの位相があるのかわからないままだ。「ソシュールの言語観に立つならば、文学は、依然として言語とは別のものである⁶。」ソシュールのラングのような観察の立場にいる限り、対象を指示する記号としての言語の機能は理解できたとしても、その言語がなぜ文学を生じるかは説明できない。「要するに、文学は、言語の匂いゆく姿において把握されるものであり、折目正しい言語であり、綾ある言語であるということになる⁷。」

言語は自己の外の世界に向かい、そこに働きかけるための道具にもなれば、一方で、自己の内奥に沈潜し情意の火種になるときもある。いずれの場合にも主体が関与しているという実感はたしかにある。ただ、言語についてまともなことを言おうとすると、なぜ、こうも異なる言語の性質に対峙することになるのか。時枝の言う「眺める歌」にも場面の選択や対比といった主体の「意欲的活動」がある。さらに、この主体の態勢は、歌人本人が五七五七七という三十一文字の短歌形式を選択したこと由来する。こうした意味において、短歌主体の活動はじゅうぶんに「主体的」と言っている。

しかし、次のような歌はどうであろうか。ここでは読み手は短歌主体の視覚や聴覚や心像の動きといったものを自己の内部で再現しつつ鑑賞するというよりは、そこにあらわれる対象のイメージをそのまま受け止めるよう強いられている感がある。

原子爆弾官許製造工場主母堂推薦附避妊薬（塚本邦雄）⁸

6 同書, p. 129.

7 同書, p. 148.

ゆく秋の大和の国の薬師寺の塔の上なる一ひらの雲（佐佐木信綱）⁹

一首目では連続する漢字の形態と意味から、禍々しいイメージが喚起され、そこから原子爆弾と避妊薬の因果関係が短絡することで「この避妊薬さえあれば原子爆弾などなかったのだ」という禁忌をはらむ仮想が生じる。二首目では助詞「の」の連続によって、「ゆく秋」という心像を含む像から「一ひらの雲」という具体的な視覚像にズームアップしつつ読み手の視線が導かれる。一首目における猥雑な漢字像や、二首目の焦点を変えながら導かれる視覚像のいずれにも、主観的な解釈や、そこに由来する多義の可能性を排したままの直のイメージが表れており、「何かを写したもの」という代理表象としての記号の性質が色濃く出ている。私たちが「犬」という語を取り上げ、その音と意味にだれもが合意するように、ここでは同じものを見ているという感覚に導かれ、主体の活動を経由せずとも、視覚や聴覚への働きかけをもって言葉がすでに充足しているかのようである。主体の「陳述作用」が希薄で、対象指示性の極めて強いこうした機能について時枝の言語学はどう説明するのだろうか。指示性の極に大きく振れたからといって、主体の情意は少しも萎えてなどないはずだ。だとすれば、指示や表象といった機能の側から言語を考えることにもやはり理があると言えるであろう。指示性の側から言語を考えると、何かを意味する「像」として言語を考えることである。

8 塚本邦雄『塚本邦雄歌集』、現代詩文庫、思潮社、2007年、p. 9. 初出は『透明文法』、大和書房、1975年。穂村弘は塚本の以下の短歌について、「掲出した五首には「われ」という言葉及び視点が見られない。近代短歌の原点である一人称「われ」を廃することによって普遍性の奪回が試みられている」と言っている。（池澤夏樹・穂村弘・小澤實選『近現代詩歌』、河出書房新社、2016年、pp. 280-281）

革命家作詞家に凭りかかられてすこしづつ液化してゆくピアノ
日本脱出したし 皇帝ペンギンも皇帝ペンギン飼育係りも
突風に生卵割れ、かつてかく撃ちぬかれたる兵士の眼
ロミオ洋品店春服の青年像下半身無し***さらば青春
馬を洗はば馬のたましひ互ゆるまで人戀はば人あやむるころ

9 『近現代詩歌』（前掲）、p. 219.

III

聴覚映像 *image acoustique* や聴覚印象 *impression acoustique* というのはソシュールが繰り返し用いた語彙である。こうした語彙が象徴的に物語るように、聴覚にうったえ「像」を喚起することが、言語の本性であると考えたソシュールは、この「像」の性質を考えるにあたって、これがどんな性質の単位 *unité* からなるかを考えた。単位を志向するということは、ともすると言語を計量的・数理的な分析に委ねるかのような印象を受けるかもしれない。しかし、ソシュールの言う単位とは、そうした言語の外側からの分析によって演繹されるものではなく、常に感覚とのつながりを保ちつつ心像として実感できるもののことである。

こうした単位=実在=心像で一貫する言語学者が、言語の実践を考えるとどうなるのだろうか。時枝は知らなかったはずだが、ソシュールには言語 *langue* がどういう契機を経て言述 *discours* を生じるか、という時枝とほぼ同じことを問う一節がある。

言語は言述のために創られている。では、言語と言述の違いとはなにか。また、言語が言述として活動状態になる、そんなことが言える瞬間とはどういう時であろうか。種々の概念が言語にはある（すなわち言語としての体裁をしている）。例えば「牛」「湖」「空」「赤」「悲しい」「五」「割る」「見る」など。これらの概念は、いつ、どのように、どんな相互作用によって、どんな条件のもとで、言述を形作るのであろう¹⁰。

ヴェーダ詩編の研究ノートに残されたソシュールのこの一節は、時枝と同じ問題に対峙し、しかし、異なった結論に至るところが面白い。言語と言われて私たちの意識に浮かぶのは「牛」「湖」「空」などの語だ。しかし、実際のところ言語は言述としてのみ顕在化する。そこには言述化への契機が何かあるはず

10 Jean Starobinski, *Les mots sous les mots: Les anagrammes de Ferdinand de Saussure* (cité par la suite: *MSM*), Gallimard, 1971, p. 14. (傍点は鈴木)

だ。ここまでの前提は共有されている。そこで、時枝は主体の活動があれば言語は言述へと転化するのだと言い、一方で、ソシュールはその現象を定義付けることに躊躇を覚えている。ソシュールはこの問いに正面切って答えることはなかったが、それでもこの問いを抱え込んだまま一連の思索を残すことになる。

さて、主体については、ソシュールが用いる語彙に「語る主体」 *sujet parlant* というものがあり、この用語については多くの積極的な解釈がなされてきた。それは、この主体が、主体という字義に反して少しも主体的ではないことに触発されたためなのかもしれない。事実、「語る主体」は能動的に言述行為を産出する主体ではなく、聴覚映像や聴覚印象といった「像」を抱く主体なのである。これでは言述や文が存在することの根拠になろうはずもない。言語そのものについては、人はいささかも主体たりえない。できることと言えば、音と意味を持つ「語」を心に抱き、人と同じように聴き語ること、このささやかな実践がソシュールの言う「語る主体」の営為なのである。

基準：実在するものとは、語る主体がある度合を持って意識するものごとである。意識しているもの、また、意識できるものだけがすべてである。ところで、どんな言語状態にあっても、語る主体は語より小さい形態をまとった単位、すなわち意味をともなった単位を意識している。たとえば、フランス語では、-eur という要素が意識され、これがなんらかの用途で用いられると、*graveur, penseur, porteur* という行為者の観念をもたらす¹¹。

引用中に二箇所ある「語る主体」を含む文の述部には、いずれも「意識する」という言葉が現れているように、こうした「意識する主体」こそがソシュールの言う主体なのである。語る主体が意識するのは、なにも語だけとは限らず「語より小さい形態をまとった単位」にまで及ぶ。主体はある度合において *graveur* を意識しつつ、それとは異なる強度で行為者 -eur を意識するので

11 Saussure, *Ecrits, de linguistique générale*, texte établi et édité par Simon Bouquet, Gallimard, 2002, pp. 183-184. (傍点は鈴木)

ある。なぜならば、それらは音と意味をまとった「像」であり、ひとつの単位として実感できるからである。さて、言述はどうであろうか。この問いに向き合うにあたって、彼は当然こうした自らの言語学をもって考えたはずだ。もし言述が実在するというなら、それはいかなる単位から成るか、と。

ジュネーヴ大学で言語一般を対象にした講義を始める前年の1906年から、1909年に至るおよそ3年間に渡って、ソシュールは後にアナグラム研究と呼ばれる思索に取り組んでいた。当初、ソシュールは、古風なサトゥルヌス詩に見られる語頭子音の反復（アリテラシオン）が、単なる詩法上の規則ではなく、そこには何か印欧語詩に普遍的な規則があるのではないか、とと思っていた。印欧詩人が脈々と受け継いできた規則を、どうにか明らかにできないものかと思いに駆られたソシュールはやがてある結論に達する。それは、詩人は名を模倣し *imiter un nom*, 特定の固有名を構成する音節を詩中に配置することで詩作する、というものであ¹²。

たとえば、ソシュールは詩行 *AD MEA TEMPLA PORTAT*（我が神殿に捧げよ）には、次の二つの理由から *APOLLO* の名がアナグラムとして存在すると言う。

- 1) この詩行の音節を用いて *APOLLO* の音が再構成できる。
- 2) この詩行が *APOLLO* と縁のあるデルフォイの神殿に供物を捧げる場面である¹³。

詩人が詩作において、どの程度まで *APOLLO* のようなテーマとなる語を意識していたかはわからない。ただ、それでも詩人はこの語をモチーフに詩を紡いだはずだ。固有名 *APOLLO* が存在することは、音と意味の両面からみてまちがいない。詩行のディスクールは、このテーマ語から生まれ、観察者である私はそうした詩人の営為を遡行し再現したのだ。しかし、こうした論理に私た

12 Cf. 鈴木隆芳「言語の実在についてソシュールはどう考えたか——ソシュールのアナグラム研究の意義——」in『関西フランス語フランス文学』第20号、日本フランス語フランス文学会関西支部、2014年、pp. 39-50.

13 *MSM*, pp. 69-70.

ちは共感することができない。そうソシユールに言われたところで、これがなぜ実在の証明になるのかが少しもわからないからである。APOLLO はただの偶然ではないか、他の語でも同じようなことが言えるのではないか、という常識的な反論がすぐにも口をついて出てしまう。いったいそこまでしてソシユールは何を確かめようとしていたのだろうか。そして、これがソシユールが言述について考えた証拠となるのはなぜだろうか。

アナグラムの有無についての検証作業を、そこで彼が対象とした言語単位の水準に注意しながらたどってみると、それが次の三つの水準に関わっていることがわかる。

N1：音節もしくは音素に相当。APOLLO を構成する音単位の水準。

N2：ほぼ語に相当。APOLLO という記号（シーニュ）の水準。

N3：詩行ディスクールに相当。アナグラム APOLLO を含む言述の水準。

それぞれの水準はソシユールが実際に取り組んだ研究分野に相当し、このうち N1 および N2 については、ソシユールは実在する単位がどういうものであるかをすでに述べてきている。もし、これと同じ原理がディスクール（N3）の水準に適用できたならば、ソシユールのアナグラム研究は、言述に存在の基盤を見出すことができたはずだ。なぜそうはならなかったのか。N1 および N2 における実在性とアナグラムの実在性をつき合わせてみるとどのようなことが見えてくるだろうか。

N1：単位＝音

ここでは史的音声学 *phonétique* および生理音声学 *phonologie* における単位が対象となるが、その単位の基盤になるのは音の同一性 *identité* である。史的音声学について、ソシユールが21歳で著した『覚書』を例にとれば、これは印欧語における音単位の同一性 *identité* を問う書物であると言える。現代の印欧諸語で /a/ の表れる頻度が /e/・/o/ に比べて多いことに注目したソシユールは、現代語で /a/ として表れている音は、起源をたどれば別の音なのではないか、と仮説を立てる。ある /a/ は、かつて同じ /a/ であったのかもしれないが、あ

る /a/ は他の音から派生したものであったり、または複数の音の結合から生じたものではないか。だとしたら、現代印欧語の /a/ を、そのまま純然たる単位 /a/ として扱うことはできないはずだ、というのがここでの単位の問い方である¹⁴。

また、生理音声学では1897年にジュネーブ大学の夏期講座において「音節の理論」というテーマでソシュールは話をしており、これはある音が他の音と連続した場合に、音単位の同一性はどうなるかという問題を扱ったものである。たとえば、apa と表記される言連鎖があった場合、ここにはいくつの音があるだろうか。もし3つと答えたならば、それは聴覚印象を正しく分析できていないからである。実際の口腔の動きと、それに伴う聴覚印象を分析してわかることは、連鎖 apa の p が単一の印象から構成されてはいないということである。はじめの a から p に差し掛かるとこで、まず一回口を閉じる動作があり、これがひとつの聴覚印象を生む。そしてこの p から次の a に移行する際には、今度は口を開く破裂音のような感覚が生じ、これには先とは別の聴覚印象がある。したがって、p は表記上ではひとつの文字だが、実際の正しい聴覚印象は appa となる。

以上のように、N1 の水準での実在性については、その音単位が純然かつ単純であるかどうかが問われ、その後、異なる環境に置かれた二つの音の同一性が確保される。この原理を N3 に適用すると、固有名 APOLLO を構成するそれぞれの音節と、APOLLO を含む言述中に散在する音節が同一であることは可能であろうか、となる。もちろん可能である。単位として一度抽出された音は、史的変遷に曝されようとも、また、他の音と連続しようとも、同じ音であり続けるからだ。したがって、ソシュールは言述のレベルにある詩行の音と、APOLLO を構成する音が、同じ単位から成ることを確信できた。すなわち、音のレベルでは両者を架橋することができたのである。

14 Saussure, *Mémoire sur le système primitif des voyelles dans les langues indo-européenne*, Leipsick, B.G. Teubner, 1879. 主に序文を参照。

N2：単位＝語

ここでも同一性が問われるが、それは語 APOLLO (N2) と APOLLO を含む言述 (N3) の同一性である。ソシュールにとって、語の実在性は、語る主体が度合を持って意識し、それがさらにより小さな有意単位を生じることによって確保された。ところが、この実在性の原理をアナグラムに適用するにあたり、ソシュールの証明に困難が生じる。それは語 *graveur* が *grav-eur* と分割できるのと同じ具合で、言述はなんらかの下位単位に分割できるのか、という問題である。*grav-eur* を分割した場合に表れる下位単位の特徴は、*grav-*/*-eur* の双方ともがもとの *graveur* の「像」を保持していることである。音と意味の「像」をそのまま保持した下位単位が生じるのである。これが語の水準での実在性の証となるのだが、さて、言述はこうした有意下位単位を含むことができるだろうか。以下の X に相当するものがそれである。

言述 > X > 語 > 接辞など

語と言述の間にある X、それは詩行の意味と音の「像」を保ったまま収斂しつつ、言述と語の間にあるなにかである。言述に語と同質の実在性を認めるにはこの X という度合が必要であったのだ。しかしながら、わたしたちの言語にはこうした水準の言語事象は存在しないのである。

ところが、ソシュールは存在しないはずのものを見てしまった。彼はこの X を「首座」*locus princeps* と名づけた。それは「密集し、かつ、ここだと限定できるような一連の語群」であり、アナグラムが「より広範囲に渡った、したがって、より拡散した」ものなのである¹⁵。スタロバンスキーはアナグラムとなるテーマ語の性質を敷衍しつつ「潜在的なテーマ語が、顕在的な詩行と異なるのは、もっぱら、テーマ語が収斂されているという点においてだけである¹⁶」と言うことで、ソシュールが語と言述の同一性を志向していたのではないかと推論している。なぜ、ソシュールは語の実在性から始めなくてはならな

15 *MSM*, p. 50.

16 *MSM*, p. 107.

かったのだろうか。

語以外に単位として持ち出せるものはないかを考えてみるのもいい。たとえば、具体的単位は文だけだと言いはる視点がある。(中略)文では多様性がすべてだ。もし何か共通のものを見つけたすとしたら、またもや語に行きつくしかない。¹⁷

実際のところ、この言葉に反してソシュールは、言述の多様性の渦中にまで純然たる「像」として存在する単位を求めた。それは代理表象としての記号という指示性の側から言語を考える徹底した思想であったと言えよう。ソシュールや時枝より以降、言述について考えるためには、こうした主体性と指示性はどう向き合うかが重要な意味を持つようになる。時枝とソシュールが示した二つの位相を持つ言述という現象をどうとらえるべきか。こうした問題について今後論じたいと思っている。

結論と今後の展望

言述という言語上の現象を考えるにあたって、時枝とソシュールを敷衍しつつ論を進めたのは、この現象について、それぞれが主体性と指示性という異なった位相から一貫して考え抜いた言語学者だからである。言語を主体の活動とみなした時枝は、理論上は大きな困難を抱えることなく、言述という現象を説明できたが、言語を指示性において考えようとしたソシュールは言述について決定的なことは述べずにおわった。

時枝・ソシュール以降、私の知る限りでディスクールについてすぐれた思想を残した言語学者や思想家には、ほぼ例外なくこうした指示性・主体性の問題が表れており、とりわけバンヴェニスト、吉本隆明、ミシェル・フーコーに

17 F. de Saussure, *Deuxième cours de linguistique générale (1908–1909) d'après les cahiers d'Albert Riedlinger et Charles Patois*, texte français établi par Eisuke Komatsu, Pergamon, 1997, p. 20. なお同書からの引用に際しては、フェルディナン・ド・ソシュール、前田英樹訳・注『ソシュール講義録注解』、法政大学出版局、1991年を参照した。

は、この問題意識がはっきり読み取れる。バンヴェニストは人称代名詞の対立構造に指示性と主体性の二重性を見出し¹⁸、また、吉本隆明は、指示性を指示表出、主体性を自己表出として自らの言語論を展開している¹⁹。さらに、主体性については、フーコーが「さまざまに異なる個人によって実際に満たされる特定の空虚な場所²⁰」と言うことで、恒常的かつ固定的な一人称性を否定している。こうしたディスクール論の系譜において、自らも考えてみたいと思い現在調べ始めている。

18 バンヴェニストの考察の一例を示す。人が「もうすぐ天気が変わると思うな」*je crois que le temps va changer*と言う時、この言述の「思う」*je crois*は、「私が思う」という思考の働きを指示しているのではなく、「天気が変わる」という指示性の強い言述を主観的な言述に変換している。すなわち、「天気が変わる」という言述の指示性を「私は思う」という主観による主体性によって包み込もうとしているのである。日本語においてこれと同様のことを表す場合には、述部での助詞・助動詞の動きに特徴が表れるであろうが、バンヴェニストが言っているのは、それぞれの言語が、たとえ顕在的な形式においては異なるとはいえ、言述には主体性としての「わたし」が宿る位相があるということである。(Benveniste, *De la subjectivité dans le langage in Problème de linguistique générale 1*, Gallimard, 1992(1976), pp. 258–266.)

19 吉本隆明が『言語にとって美とはなにか』で示した指示表出と自己表出という概念の意義は、これが言語の変化を説明できる装置であるということだ。「ある時代のひとつの社会の言語水準は、ふたつの面からかんがえられる。言語は自己表出の面から、わたしたちの意識にあるつよさをもちとらすから、それぞれの時代がもっている意識は言語が発生した時代からの急げきなまたゆるやかなつみかさなりそのものにほかならない。また、逆にある時代の言語は、意識の自己表出のつみかさなりをふくんで、それぞれの時代をいきでゆく。しかし指示表出としての言語は、あきらかにその時代の社会、生産体系、人間のさまざまな関係、そこからみだされる幻想によって規定される。」(吉本隆明『言語にとって美とはなにか I』, 角川ソフィア文庫, 2001年(1965年))

また、吉本隆明は言語学について次のように言っている。「言語が意味や音のほかに像をもつというかんがえを、言語学者はみとめないかもしれない。しかし〈言語〉というコトバを本質的な意味でつかうとき、わたしたちは言語学をふり切ってもこの考えにつくほうがよい。言語学と言語の芸術論とが別れなければならないのは、おそらくこの点からであり、言語における像という概念に根拠をあたえさえすれば、この別れはできるのだ。」(太字は吉本)(同書, pp. 113–114.)この時点での吉本の思想は時枝の立場に近い。吉本は、シュールの言語学が指示性の位相でしか言語を扱わないため、文学に至ることが難しくであろうと主張している。

20 Michel Foucault, *L'Archéologie du savoir*, Gallimard, 2015 (1969), p. 131. ミシェル・フーコー『知の考古学』, 慎改康之訳, 河出文庫, 2012年, p. 179.

フーコーの言うことに従えば、書物の主体は必ずしも著者本人でなくとも良いことになる。なるほど、その通りであろう。かつて私が学部学生の頃、恩師から「これを読んでみたら」とソーシャルに関する本を手渡された時、私にとって本の主（ぬし）は、ソーシャルや本の著者ではなく、恩師その人であったように思う。